

II 特別連載 II

科学技術  
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第477回

## 愛媛大学の活動報告



山中 亮  
(愛媛大学  
社会共創学部准教授)

スポーツ健康データがつながく

### 日印人材育成プラットフォーム

2025年12月、インド工科大学ハイデラバード校(IITH)の学生たちを愛媛に迎えた二週間は、国際的な研究交流であると同時に、人と人との出会いの豊かさを改めて実感する時間となりました。本プログラムは、スポーツや健康分野の実データを起点として日本とインドがそれぞれの強みを生かしながら国際共同研究と人材育成を進めることを目的として実施されたものです。データサイエンスやITといった専門分野の学びに加え、異なる文化や価値観に触れることそのものが大きな学習機会となることを目指して企画されました。

ハイデラバードから松山へ到着した初日、長旅の疲れの中にも期待をにじませた学生たちの姿が、今も心に残っています。慣れない環境に少し戸惑いながらも、新しい出会いに胸を膨らませていた様子が印象的でした。翌日から始まったキャンパスツアーやアイスブレイクでは、最初はやや緊張していた表情が時間の経過とともに和らぎ、次第に笑顔へと変わっていきました。

愛媛オレンジバイキングスの練習見学では、スポーツという共通の関心を通じて、言葉や文化の違いを越えた自然な交流が生まれ、学生同士の距離が一気に縮まっていくのを感じました。

スポーツデータ分析の事前課題発表や試合観戦では、学生たちが数字の背後にあるプレイングの意図や選手一人ひとりの動きに目を向け、活発に意見を交わす姿が見られました。「このプレーは、データでどう捉えられるのか」「現場で起きていることを、どのように数値として表現できるのか」と考えることで、学びが教室の外へと広がっていく感覚を共有で

プログラムスケジュール	12月8日	松山着、オリエンテーション
	12月9日	愛媛オレンジバイキングス練習見学、ラジオ出演
	12月10日	スポーツデータ分析事前課題発表、バスケ試合観戦
	12月11日	広島訪問、平和記念公園・資料館で平和学習
	12月12日	インド向けスイーツ共同開発ワークショップ
	12月13~14日	日印合同による共同研究ディスカッション
	12月17日	地元企業ダイキアクシス訪問
	12月18~19日	最終成果発表会、交流会
	12月20日	今後の学生交流・共同研究に向けた総括議論
	12月21日	出国

きたように思います。研究と実践が結びつく瞬間に立ち会えたことは、本プログラムならではの大きな成果でした。

また、広島での平和学習や、地元和菓子店とのスイーツ開発ワークショップ、地域企業への訪問など、学術の枠にとどまらない活動も数多く経験しました。とくに、大判焼を囲みながら文化や食に対する考え方を語り合う時間には、互いの背景を尊重し合おうとする温かな雰囲気は自然と生まれていました。

こうした多様な体験を重ねることで、学生たちの学びは単なる知識習得にとどまらず、より立体的で記憶に残るものになったと感じています。

### ■ 後日談と今後の展望

共同研究の議論や最終成果発表を経て、学生たちからは「日本がとても好きになった」「日本で研究してみたいと思うようになった」といった声が多く聞かれました。国を越えて共に学び、同じ課題に向き合った経験は、IITHの学生にとっても、自身の視野を大きく広げる学生にとっても、自身の視野を大きく広げる



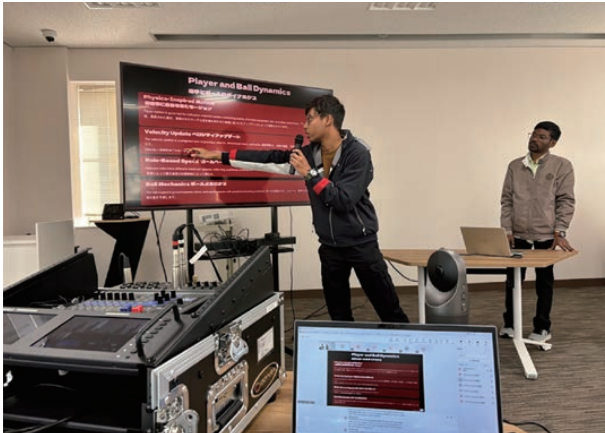
エディオンピースウィング広島 見学の様子。サンフレッチェ広島スタッフによるスタジアム設備の説明を受ける参加者



愛媛オレンジバイキングスのトレーニング視察。選手の動きを間近で観察し、データとの関連を学ぶIITH学生



修了式。招へい者、愛媛大学生全員で「ナマステ」のポーズ



共同研究ミーティングの様子。スポーツデータを用いた解析手法について議論する研究チーム

貴重な機会となりました。短い期間であったからこそ、一つひとつの出会いや何気ない会話が濃く、深く心に刻まれたのかもしれない。別れの日、空港で交わした握手と言葉は、交流の終わりとはいくよりも、これから続いていく関係の始まりを感じさせるものでした。帰国後にオンラインで行った事後の振り返りでは、今回の経験が今後の進路選択や研究テーマを考える上で大きな影響を与えたことが、学生たち自身の言葉からも伝わってきました。互いの近況を報告し合いながら、再びどこかで共に学ぶ日を思い描く姿も見られました。今後は、このような短期交流を入り口とし

ながら、帰国後も研究や学びが継続していく仕組みづくりを進めていく予定です。修士・博士課程レベルでの共同研究へとつなげることも、過去の成果や議論を共有し、次世代へと引き継ぐための仕組みの構築も視野に入れています。時間をかけて発展していくことに終わらず、考えています。本プログラムを通じて築かれた友情と感激は、やがて研究連携や社会実装へと形を変え、次の世代へと受け継がれていくことでしょうか。愛媛という地域から世界へと広がるこの取り組みが、グローバルな人材育成の基盤として着実に成長していくことを期待しています。